

平成 21 年度水産海洋技術センター研究成果発表会

平成22年2月5日に広島市内の鯉城会館において研究成果発表会を行いました。漁業関係者をはじめ多数の方に来場いただき有難うございました。発表した成果の概要は次のとおりですが、詳しくはホームページにも掲載していますのでご覧ください。



苗床シートを使った省力・低コストのアマモ場修復手法の開発

主任研究員 相田 聡

アマモ場造成法として取り組んだアマモの種をシートに発芽させる生産方法は、現場海域でも有効であることが確認できたが、コスト面や潜水作業を伴うことなどが技術の普及に障害であった。このため、実生苗床を低コスト、低労力で海底に敷設する方法を検討し、取り組んだ結果、従来より省力・低コストでアマモ場を修復することが可能となった。



一粒かき養殖の定着化技術開発研究—カゴ養殖技術の改良—

副主任研究員 田村 義信

平成 19 年から本格的に一粒かきの種苗が出荷されるようになったが、市販の真珠カゴ等で養殖すると、カゴの汚れなどによりへい死や成長不良の問題が起きた。このため、一粒かきに適したカゴの素材や構造を検討し、理想的なカゴの形を提案した。試作したカゴで一粒かきを試験養殖したところ、対照区に比べて均一で成長の良いかきを得ることができた。



半世紀に及ぶ広島湾のカタクチイワシ卵稚仔調査について

副主任研究員 横内 昭一

1955 年から調査を行っているカタクチイワシの調査データを解析した。その結果、産卵のピークが以前より早まる傾向にあることと、主要な産卵場は広島湾南西部から湾中央部へ移動していることが分かった。その理由として水温の影響が考えられたが、明確な関係を示すことはできなかった。漁期初めに産卵親魚を獲りすぎの傾向があり、それが後半の卵稚仔数の減少に影響していると思われる、親魚の漁獲圧力を少し下げることが提案する。



冷水病に強いアユ系統の作出に関する研究

—先端技術を使ったマーカー選抜育種技術—

副部長 飯田 悦左

1993 年に本県河川で確認されたアユの冷水病は、いまだに内水面漁業に甚大な被害を与えている。被害対策で取り組んだワクチン開発研究の過程で、冷水病に強いアユの系統の存在が明らかになりこれを用いた分子育種の研究を行った。遺伝子解析の結果、冷水病耐性の遺伝子座を特定し、これを用いたマーカー選抜育種を試み、室内実験及び養殖場レベルでも選抜技術の有効性が実証された。



あいさつする
節家所長と
前川センター長

